

全国漢文教育学会 発表資料

「藤澤東咳から石川啄木へ―関西護園学派に関する考察」 田山泰三(英明高等学校教諭)

本日紹介する主な人物

石川啄木 一八八六―一九一二

歌人。本名一。岩手県日戸村生まれ。住職の家に生まれ気位高く育つ。盛岡中学在学時に「明星」に感銘、一七歳の時、文学を志して上京するが健康を害し帰郷。二〇歳で処女詩集『あこがれ』を出版、天才詩人の評判を得る。が両親妻子を養わねばならぬ貧困の現実と自分の才能を過信するプライドに引き裂かれ続け、肺結核で不遇の生涯を閉じた。歌集『一握の砂』、『悲しき玩具』、詩集『呼子と口笛』等がある。

歌の表記は三行書きを主とする。

東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて

蟹とたはむる

泊園関係者

藤澤東咳 一七九四―一八六四

寛政六年(一七九四)、四国高松藩(現高松市塩江町中村地区)に生まれる。名は甫(はじめ)、字は元発。中山城山に師事して荻生徂徠の古文辞学を修めるとともに、長崎に留学して中国語を学ぶ。文政八(一八二五)年、三二歳の時、大阪淡路町御霊筋西(淡路町五丁目)に「泊園塾」(のちの泊園書院)を開く。その後、東咳は大阪を代表する碩学として活躍し、高松藩から十分に列せられるとともに、豊岡藩主・京極高厚、尼崎藩主・松平頼胤の賓師として招かれ儒学を講じた。平野含翠堂にも毎年出講した。幕末には勤皇の志士の慕うところとなり、泊園は大阪最大の私塾として栄えた。受講の門人は三千余名にのぼる。公刊された著作に『泊園家言』、『東咳先生文集』、『東咳先生詩存』などがあり、多くの自筆稿本も伝わる。

藤澤南岳 一八四二―一九二〇

東咳の長子。天保一三年(一八四二)生まれ。名は恒(つね)、通称は恒太郎、字は君成。号は南岳のほか七香斎、香翁、醒狂子、九々山人など。慶応元年(一八六五)、二四歳で家督を継ぎ高松藩の儒官となる。慶応四年(1868)、藩論を佐幕から勤皇へと劇的に転換させ、藩滅亡の危機を救う。その功により藩主から南岳の号を賜わった。その後、明治新政府からの出仕要請を断り、明治六年(一八七三)、三三歳の時、泊園書院を大阪船場に再興する。のち、淡路町一丁目に書院を移す。

南岳は当代随一の学匠として名声高く、全国から学生が雲集し、泊園書院の黄金期を作っ

た。警咳に接した門人は五千人といわれ、交友の範囲も学界や教育界のみならず、政界や実業界に広がり、大阪を代表する文化人として活躍した。逍遙遊(しょうようゆう)社における漢詩文の集いや、孔子を祭る積奠(せきてん)も始めている。著述はきわめて多く、公刊された主な著作として『自警蒙求』、『増補蘇批孟子』、『校訂史記評林』、『修身新語』、『評釈韓非子全書』、『論語彙纂』、『万国通議』、『七香齋文雋』、『七香齋詩抄』がある。このほか、未公刊の自筆稿本は膨大な量にのぼる。

藤澤黄鵠 一八七四—一九二〇

南岳の薫陶を受け、さらに東京に出て名門の共立学校に学ぶ。その後、清国南京に二年間留学して中国語を学ぶなど研鑽を積んだ。帰国して南岳引退後の書院経営を引き継ぎ、明治四一年(一九〇八)年、三五歳で衆議院議員に当選。同四四年(一九一一)、日本南北朝の正統に関する「南北朝正閏問題」をめぐる桂太郎内閣に質問状を提出して世論を沸騰させ、議員を辞職した。

のち大阪にもどり、自宅で子弟の教育を行うかたわら、大阪府立高等医学校(のちの大阪大学医学部)嘱託教授の任についた。漢詩においてもすぐれた才能を示した。編著に『亡友詩存』、『菁莪餘録』、『洗醒餘録』、『我が観たる孔子』などがある。

啄木に泣かれた藤澤代議士

## 本論

石川啄木歌集『悲しき玩具』中に

藤澤といふ代議士を

弟のごとく思ひて、

泣いてやりしかな。

という作品がある。

藤澤元造(黄鵠)は一九〇三(明治三六)年一月父南岳より家督を相続し泊園書院院主となる。名実共に泊園書院の代表者となり得た藤澤黄鵠は一九〇八(明治四一)年五月一五日に第十回衆議院議員選挙に大阪府郡部区より立候補し当選する。

当時皇統の正閏を論じる「南北朝正閏論争」が国内で大きな話題となっていた。南北朝時代とは正確には一三三六(延元元・建武三)年に足利尊氏による光明天皇の践祚、後醍醐天皇の吉野転居により王朝が「南(大和国吉野行宮)」と「北(山城国平安京)」に分裂してから一三九二(元中九・明德三)年に両朝が合一するまでの期間。この期間は皇統が二つに分かれていたわけで「南朝」と「北朝」という考え方は両朝合一後も長い間主に日本の知識階層間で論じられた。江戸時代になって武士や公家の間で『神皇正統記』や『太平記』が読まれ南朝に同情的な見方がひろがり、徳川光圀は『大日本史』において南朝を「正統化、頼山陽も南朝正閏の側に立ち『日本外史』等で南朝に関する記述を行っている(『日本外史』中の楠木正成兄弟や児島高德ら南朝の忠臣の話は漢文教材として江戸時代藩校や

私塾で教えられていた)。江戸時代から明治時代前期にかけ南朝の遺臣は(特に武士階級において)「正義」の具現者、体現者となり得ていた。

一八八九(明治二二)年に発布された大日本帝国憲法において天皇は国の元首であり統治権の総攬者であることが定められる。並行して学問の世界では西洋の学問手法に基づき『太平記』等の記述を他の史書や日記等の史料と比較する実証研究が行われ国定教科書である国史の教科書の記述にその研究手法が反映。東京帝国大学に学んだ喜田貞吉が主となって行った一九〇六(明治三六)年と〇九(同四二)年の国定教科書の改訂では南北両朝は対等な立場で記されたが一九一〇(同四三)年頃からこの記述に対する疑問「南朝正閏論」が政治家、教育関係論者間で話題になりはじめていた。

そのような情勢下国会議員たる藤澤元造は一九一一(明治四四)年二月に国会に質問書を提出。南北朝正閏論争の舞台が国会の場にうつり議論が公の場でたたかわされることになる。併し藤澤元造代議士は直前になって桂総理に対する質問を撤回、議員辞職という「不可解」な行動を取った。

視点を啄木に向ける。啄木が読んだのはこの『東京朝日新聞』の報道と思われる。啄木は「明治四十四年当用日記」に次のように記す。

二月十七日 曇

朝に曇がふつたさうである。何となく不愉快な天候であつた。せつ子が郁雨の手紙を持つて来た。簡単にかいてあつた。さうして雑誌がほんたうに出るのかと書いてあつた。手紙をよんでから更に新聞をよんで予は急に気分が悪くなるのを感じた。南北朝事件で昨日質問演説をする筈だつた藤澤元造といふ代議士が、突然辞表を出し、不得要領な告別演説をして行方不明になつた。新聞の記事は新聞の憎むべき迫害の殆ど何処まで及ぶかを想像するに難からしめた。予の精神は不愉快に昂奮した。そのためか少し発熱した。社の加藤さんが見舞に来てくれた。

冒頭に紹介した『悲しき玩具』中の歌は啄木日記におけるこの記述から藤澤元造をさすことが知られている。

藤澤元造については質問撤回、議員辞職のことだけに注目が集まり啄木研究者間で共有する情報はかなり曖昧。「藤沢の挙動は精神錯乱に近く、相当の圧迫と買収が行われたようすである。」(一九六九(昭和四四)年角川書店発行『日本近代文学大系 石川啄木集』)

藤沢桓夫の証言

黄鵠は亡くなった時が五十歳で、ものすごい熱血漢でした。しかも明治の人間で、漢学者の熱血だから愛国者だった。三十代の終わりに代議士になっています(中略)代議士になつたとたんに黄鵠は、日本の皇室では南朝が正統ということになっているが、今の天皇はよく調べたら北朝と違うのか、といい出したのです。今ではこういうことは何でもないこ

とですが、当時、大問題だったらしい。それで、陸軍大臣から総理大臣になった桂太郎という人がえらくあわてた。反対派が、得たり賢しと何やかやいい出して、桂内閣打倒、みたいになってきた。で、桂大臣はあわてて黄鵠伯父を呼んで説得したのです。熱血漢であるだけに単純なんです。「桂閣下は憂国の人である」とのちにいつていたのを、ぼくの母親などもきいたことがあるらしいです。つまり、まるめこまれたのだとぼくは思います。結局辞職して、南北朝正閏問題は結局うやむやになってしまった。ある時、石川啄木の歌集を読んでみると、「藤沢という代議士を弟のごとく思っていて泣いてやりしかな」という歌が出てきたので「あれっ」と驚いたのですが、啄木という人は、ああいう人だから、ああ、うまいことまるめこまれよったなあ、かわいそうに、という気持ちでああいう歌を作ったのでしょうか。(中略) 松本清張氏が『東京帝国大学』だったか、ぼくは読んでいないけれど、南北朝正閏問題のことをどこかの週刊誌に書いた小説に「藤澤元造は桂に買収された」と書いてあるらしい。しかしこういうことは絶対に取り得ません。ことに金銭的な買収などはあり得ません。反対に桂さんの頭くらい殴って怒るような人です。(藤沢桓夫『回想の大阪文学』傍線報告者)

#### 丸山眞男の論述

藤沢代議士は桂首相に懐柔されて、突如態度を軟化し、ついに代議士を辞するが、この軟化には父、藤沢南岳からの説得も因をなしていた、といわれる。元造の祖父、東咳と父、南岳とは、ともに著名な儒者であり、あたかもこの大典に際して、東咳は従四位を贈られ、南岳も正五位に叙せられた。(丸山『荻生徂徠の贈位問題』その後)

南北朝正閏論争においては元造辞職後僅か五日後の二月二一日、時の国民党総理犬養毅が南北朝問題断崖決議案を議会に提出、以後国会内外で桂内閣を糾弾する動きが一気に高まり、政府は二月二七日付で喜田貞吉に休職を命じ教科書図書調査委員は諭旨免職となる。天皇の代数も新たに定められ教科書の記述は南朝を「吉野朝」と改める。元造が志した南朝正閏論は元造辞職後に果たされたことになった。

まとめてみると南北朝正閏論争に関する衆議院議員藤澤元造の一連の国会演説に際し政府側から「圧迫と買収」という持ちかけがあったことは否定できない。だが漢学者藤澤黄鵠の生涯を通観してみても元造代議士の「精神錯乱」は絶対に取り得ず、寧ろ丸山の主張にある通り祖父東咳、父南岳に対する「贈位」にその理由を求めるべきと思っている。

#### わらい

讃岐の勤王志士で侠客としても有名な日柳燕石の息に日柳三舟がいる。維新後大阪に出て漢学者・教育者として活動。三舟が創刊した漢詩雑誌『海内詩媒』に安藤寛、後の与謝野鉄幹が漢詩を載せている。啄木は与謝野鉄幹・晶子に憧れて文学を志した。啄木の文学の源流を関西に求めることは可能だと思う。